

# 英語 Active e-Learning の実践

## —学習へのアプローチの分析—

稲葉 みどり

愛知教育大学日本語教育講座

### *An Analysis of Students' Approach to English Active E-Learning*

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

#### 要 約

本研究では、ALC NetAcademy NEXT(アルク)の総合英語トレーニング・初級コースを大学1年生の e-Learning の授業に導入し、受講生がより効果的にプログラムを活用し、主体的に学習に取り組み、能動的に学習活動を進められる方法を模索した。e-Learning は、受講生が漫然とプログラムの指示に沿って練習をしたり、語彙・内容把握のクイズや確認テスト等に解答したり、モデルに倣って発音矯正するだけでは、必ずしも効果的で能動的な学びとは言えないと考える。そこで、本実践では、受講生がプログラムの特徴を把握した上で、自分の英語力の向上のためにどう活用したら良いかを考え、具体的な目標を設定して学習する形態に進めた。受講生は学習にあたって、学習目標、学習ユニット、練習方法、自己評価(目標達成度、成果、感想等)を学習記録に書いた。学習記録の記述から、自分に益のある目標を設定したこと、自分なりの練習法やストラテジーを用いて学習したこと、上達を意識して練習したこと等が明らかになった。これらの結果から、各自が英語の上達のために当該のプログラムをどのように活用したら良いかを考えることにより、意味のある学習を創り出し、主体的、能動的、自律的な学習への取り組みを促したことが示唆された。また、自己の取り組みを診断・評価することで、新たな目標を見出し、更なるチャレンジや学習継続の契機となったことが推察された。さらに、学習記録でセルフモニタリングすることにより、自己の学習に関するメタ認知を促したと考えられる。受講生は自分なりの e-Learning への効果的なアプローチの方法を見出し、成功、失敗、落胆、達成感等の様々な感情を伴う学習体験をバネにして、主体的・能動的に学習に取り組むことができたのではないかと思う。しかし、本実践では、英語力の上達を測定するには至らず、この点は今後の課題となった。

Keywords : 英語 e-Learning, 学習方略, アクティブラーニング, セルフモニタリング, 学習アプローチ

#### I 研究の目的

本研究では、e-Learning のより効果的な学習法について、実践を通じて模索する。英語の e-Learning では、学習者をいかに自律的に学習に取り組みさせるかが課題となる。本研究では、e-Learning システム ALC NetAcademy NEXT(アルク 2016 年リリース)の総合英語トレーニング・初級コースを大学1年生後期の授業に導入し、受講生がより効果的にプログラムを活用し、主体的に学習に取り組み、能動的に学習活動を進められるようにするには、どのような方策が有効かを、受講生の e-Learning へのアプローチを分析することにより

探っていく。

e-Learning は、受講生がリスニングやリーディングでは漫然とプログラムの指示に沿った練習、語彙・内容把握のクイズや確認テスト等に答える、または、スピーキングにおいてはモデルに倣って発音矯正するだけでは、受動的な学びの要素が強いのではないかと考える。そこで、本実践では、受講生がプログラムの特徴を把握した上で、自分の英語力の向上のためにどのように活用したら良いかを考え、具体的な目標を設定することによって学習を進めた。受講生は、その日の学習目標、学習ユニット、目標達成度、成果、課題、感想等を学習記録に書き、自己の学習を省察した。

分析では、学習記録を基に、1)e-Learning でどのようなことを学んだか、2)どのような目標を立てたか、3)自己評価はどうであったか、4)効果的、主体的、能動的に取り組むことができたか、5)英語学習の意識の変容や動機を高める契機となったか等を考察する。そして、e-Learning への取り組みの過程でのようなことが起こっているか明らかにし、英語 e-Learning プログラムの活用や学習支援等に役立てることが目的である。

## II 先行研究・理論的背景

### 2.1 先行研究

英語e-Learningへの取り組みや教育的効果を促進するための先行研究を概観する。田口(2016b)では、EnglishCentral(2015)に準拠したテキストを授業内で学習し、関連内容を授業外でe-Learningにより学習させる方法で実践し、学習履歴(学習時間、学習量、学習内容、使用端末、学習活動等)の分析から、授業外で明確な課題を設定して適宜授業で確認すること、学習履歴を透明化して他の学習者の進捗状況が分かるようにすること等が有効であると結論づけている。

田口(2016c)では、学習機会の拡充を目指して、「アルクスマートラーニング」(2013)(アルク・NTTラーニングシステム)を活用したe-Learningを行い、学習端末(パソコン・スマートフォン・タブレット等)による学習行動の特徴、長所短所等を明らかにしている。

建内(2016)では、EnglishCentral(2015)を用いた自学自習のe-Learningにおいて、題材(動画)を興味、関心、レベルに合わせて自分で選択して学習を進める方法を採用した結果、学習者の肯定的な姿勢が授業内で見受けられたことを報告している。

田口・小塚他(2016)では、NetAcademy2(2006)(アルク教育社)のコースの1つである「Power Words コースプラス」を活用したチーム対抗によるコンテストによって、多くの学習機会を提供する試みを行い、学習効果を実感できる機会の設定、友達とチームによる協働、商品授与等がコンテストをうまく運営する上での大切な要素になることを提示している。

これらの一連の研究は、e-Learningによる継続的な学習は、個人のモチベーションを高く維持することが大切であるが、学習者の自発的な学習に頼るだけでは必ずしも十分とは言えないことを示唆している。課題の達成に向けてモチベーションを保持し、継続的に学習できるよう導くには、教師から学習者にどのような働きかけをすれば良いかを探っており、この点は、本研究の課題である能動的、自律的な学習に向けたe-Learningのあり方の研究と目的が共通である。

### 2.2 e-Learningへの深い学習アプローチ

英語 e-Learning は、一般的には、提供されるプログラムに沿って、ステップを踏んで与えられたドリルやタスクを達成していくので、表面上は、能動的、自律的な学習のように見える。しかし、必ずしもそうとは言えない場合がある。漫然とプログラムのままに取り組むのであれば、一定の効果はあるといえども、受動的な学習の要素が強く、授業で一方向的に講義を聴いているのと似ているのではないかとすれば、学習への浅いアプローチ(Entwistle, McCune, & Walker, 2010)に陥る危険があると考えられる。

松下(2015, p. 18)は、アクティブラーニングにおける能動性を「内的活動における能動性」と「外的活動における能動性」に区別して考えている。そして、内的活動における能動性とは、Barkley, Cross & Major (2005)の定義「頭(mind)がアクティブに関与していること」という概念に通じるとしている。

e-Learning では、コンピュータを操作してプログラムから出される刺激に反応しているので、身体的活動という意味での外的活動における能動性は伴っていると思われる。しかし、「プログラムの指示に従った練習を繰り返す」「練習ユニットを数多くこなす」だけの取り組みは、果たして内的活動の能動性を備えた「深い学習」と言えるのだろうか。

学習者にとって意味のある学習は、深い学習へのアプローチを促進すると考えられる(溝上, 2015)。松下(2015, p. 22)は意味のある学習の概念を、「今学んでいることは自分と関わり(意味)がある」と感じ、「学んだことを使ってみたい、試してみたい」と思い、「学んだことが自分の成長につながっている(学ぶことで自分は有能になっている)」と感じるような学びであるとしている。

バークレー(2015, p. 88)は、学生の深い関与を促す条件として、「課題は適度にチャレンジングなものであること」「コミュニティ感覚」「学生がホリスティックに学べるように教えること」という3つの条件を上げている。

学習を深化させるためには、学習の過程を認知・分析したり、学習を振り返ることが非常に大切である。省察は、学び(方)の変容、学びの質の高まり、学習者としての成長の過程を自己省察的に見つめ直す有効な機会となる(関田・三津村, 2015; p. 201)。関田・三津村(2015, p. 209)は、省察はその授業で「獲得した知識・技能・態度をメタ認知する作業とも連動し、その作業は、一過性の学びを持続可能な学びへと架橋する触媒のようなもの」で、同時に、省察は学習者に意味のある学習経験をもたらすとしている。

### III 実践の概要

#### 3.1 e-Learning プログラムの概要

本授業では、e-Learning 教材 ALC NetAcademy NEXT・初級コース(アルク)を用いた。このプログラムは、リスニング&スピーキングのサブコース、計 66 ユニット、リーディング&ライティングのサブコース、計 22 ユニット、文法のサブコース、計 44 ユニット、実力テスト 2 ユニット、総計 134 ユニットで構成されている。CEFR-J A1/A2 レベル<sup>1</sup>で、学習開始レベルが TOEIC で 350 点、目標到達が 500 点を目安として作成されている。当該の授業では、リスニング&スピーキングコースを中心に学習を進めた。

当該のサブコースの 1 ユニットは、リスニング学習ユニットがインプットを中心とした練習、スピーキングユニットがアウトプットを中心とした練習が用意されている。リスニングとスピーキングのユニットは同じ英文素材が使われており、インプットとアウトプットの両面から同じ英文に繰り返し触れられるよう設計されている。1 セット(インプットとアウトプットを通して学習した場合)の合計学習時間は、およそ 40 分が目安である。【表 1】は、「リスニング&スピーキングサブコース」の学習内容である。1 ユニットは、STEP01～06 での練習で構成されている。【表 2】は、スピーキングコース 1 ユニットの学習内容である。1 ユニットは STEP01～03 までの練習で構成されている。

【表 1】リスニングコース 1 ユニットの学習内容

STEP01	練習問題
	— 音声を聞いて設問に答える。
STEP02	語彙フラッシュカード
	— STEP01 で登場した重要語句を学習する。
STEP03	語彙ドリル/語彙ドリル(結果)
	— STEP02 で覚えた語彙が定着しているかを確認する。
STEP04	スラッシュ・リスニング
	— 意味の固まりで区切られた音声を聞いて、英文を頭から理解する練習に取り組む。
STEP05	スピード・リスニング
	— STEP01 より速い音声を聞いて、英語のスピードに慣れる練習に取り組む。
STEP06	ディクテーション
	— 音声を聞いて、読み上げられた英文をすべて入力する。

【表 2】スピーキングコース 1 ユニットの学習内容

STEP01	リピーティング
	— リスニング学習ユニットでインプットした英文(1 文ずつ)を声に出す練習をする。発話した音声を録音し、お手本の音声と比べることができる。
STEP02	長文音読
	— 学習した英文を声に出して読む。
STEP03	ロールプレイ
	— 会話の流れに沿って、指定された人物のせりふを発話する。

#### 3.2 授業の概要

##### 3.2.1 授業の目標とねらい

本授業では、e-Learning を行い、英語力の向上をめざす。特に、与えられたプログラムをどのように活用して取り組んだら、自分に有益な学習ができるかを考え、自分で学習目標を設定して学習に取り組み、その達成度を評価する。同時に学習の過程・成果等を省察し、更なる学習への有効な取り組みにつなげる。

##### 3.2.2 受講生と学習環境

受講生は、教育学部現代学芸課程の1年生17名、3年生6名、科目等履修生1名、合計24名である。後期15回の授業でe-Learningに取り組んだ。パソコン室で大学設置のパソコンを利用し、一斉授業の形態で行った。e-Learningは授業外での課題学習として進めることも可能だが、本授業では大学で初めてのe-Learningにどのように取り組んだら良いかを受講生に考えさせるため、教師の管理下で、一斉授業の形態で進めた。

##### 3.2.3 授業の方法

【表 3】は、この授業の構成である。授業では、初めにオリエンテーションを行い、プログラムの使い方の説明と操作練習等(2 回)を行った。その後、自由学習を 3 回、各自が目標を設定して進める学習(以下、目標設定学習)7 回、最後に各自が選んだユニットのレシテーション(発表)とピア・フィードバック 3 回、全 15 回の構成とした。

【表 3】授業の構成(15 回)

授 業	内 容
①～②	オリエンテーション：使い方と操作練習
③～⑤	自由学習：プログラムに沿って練習
⑥～⑫	目標設定学習：各自目標を設定して学習
⑬～⑮	レシテーションと発表・フィードバック

自由学習は、実際に使って操作に慣れると同時に、プログラムの特徴やレベル等を把握する目的で実施した。自由練習の後、受講生は練習の振り返りや感想、プログラムの使い勝手等に関するレポートを書いた。

目標設定学習では、各自が英語上達のための目標を設定して、その達成に向けて練習するように指示した。どのような目標を設定するかは、受講生の裁量に委ねた。受講生は、その日の学習目標、学習ユニット、練習の感想や成果等を「学習記録」に書いた。

レシテーションは、練習ユニットの中からあらかじめジャンルの異なる4つのユニットを教師が選び、その中から受講生が1つ選んで発表することを課題とした。レシテーションの後、発表(者)に対する感想やコメント等を交換すると同時にリアクションペーパーに書いて、その内容を全員に公表する形でフィードバックした。

### 3.2.4 目標設定のねらい

当該の受講生の英語の熟達度には幅があるので、プログラムの順序に沿った一斉の網羅的な学習を課題として進めると、熟達度の高い受講生には少し退屈なものに感じられたり、熟達度の低い受講生には負担になったりして、学習動機を損なう可能性がある。そこで、本実践では、受講生が自分の熟達度に合わせて練習に取り組めるように、各自で目標を設定して学習する学習形態をとった。これにより、各自が意味のある学習ができるようにすることをめざした。

レシテーションは、新たな練習目標を与えると同時に、他の人からのコメントをもらい、フィードバックすること、また、他の人の英語を聞いて学ぶ機会を得ることを目的とした。課題(暗唱)文は、大学への問合せ(会話)、動物園の案内(案内文)、同僚との電話(会話)等の異なるジャンルから4つを選定し、その中から自分の希望のものを1つ選ぶという自由度を設けた。選択するためには、受講生は課題文全体に目を通し、好みの内容や話しやすい文はどれか等を考える必要があり、より能動的、主体的な取り組みが促されると思われるからである。

レシテーションは文字通り訳せば、暗唱だが、ここでは単に暗唱してモデル通りの棒暗記を披露するのではなく、モデルの発音やアクセント、イントネーションを規範として、自分の話しやすいスピード、音声、声色、自分なりのパフォーマンスをして、内容をきちんと効果的に伝えられることを学習目標とした。模倣のみでなく、受講生が各自の英語力や自由なパフォーマンスにより、主体的に発表する姿勢を培うためである。

## IV 取り組みの過程の分析

### 4.1 事例の分析方法

本授業の学習記録は、学習目標、到達目標、学習方法、自己評価(目標達成度、課題、振り返り等)が記述されているので、いわば、メタ認知によるセルフモニタリングの過程の記録である。

本研究では、この学習記録を基に、異なる特徴が見られた6種類の事例について、受講生がどのような目標をどのような理由で設定し、どのように取り組んだかを分析する。分析では、学習の過程で見られた行動、思考、起こった結果等について、以下のキーワードを拠り所として思考の過程を明らかにしていく。

- (1) 目標設定による課題の遂行に関わるもの  
【目標設定】【次の目標】【意思決定】【問題解決】
- (2) 効果的な学習法(達成度を意識)に関わるもの  
【学習方略】【能力診断】【学び方を学ぶ】【改善】  
【学習の自己調整】【問題】
- (3) 自己の動機づけ・情動の制御に関わるもの  
【意欲】【達成感】【実感】【不安】【失敗】  
【成功】【落胆】【克服】【チャレンジ】【継続】
- (4) 高次の思考・認知活動に関わるもの  
【気づき】【知覚】【記憶】【分析】【総合】  
【結論】【評価】【成果】【成長】【学習意義】

これらのキーワードは、主体的・能動的な取り組み、学習への関与、内的能動性、認知活動、学習への深いアプローチ、意味のある学習、深い認知活動(【意思決定】【知覚】【記憶】【思考】【情動])等の概念と関わりが深く、便宜上、4分類しているが、相互に関連している。上記には本分析では該当しない項目も含まれている。

### 4.2 事例1: 順序だった目標設定による学習

最初は、プログラムの流れに沿って、順序立った目標を立て、その達成のために練習に取り組んだ受講生(ST1)の事例をみる。ここでは、1つの練習に入る前に目標を立て、一定の練習の後にその練習で気づいた課題や成果等を踏まえて、自分の次の目標を設定して学習した地道な取り組みが見られる。

(4.1)は、この受講生が最初に設定した目標である。プログラムから流れてくる英文を聞いて理解し、オーバーラッピングができるようになることを(最終到達)目標としている。自己の英語力を踏まえて設定したものだと考えられる。

- (4.1) 聞いて意味を理解する。ある程度、文章を話せる

ぐらいになる。オーバーラッピングが目標。

【目標設定】

(4.2)では、練習の過程で、英語を聞いただけでは、理解できないことに気づき、前段階を丁寧にやるという学習方略を考えたことが分かる。(4.3)では、次の目標として、単語の学習、意味・内容の理解を挙げ、その成果として、文章の内容が理解できるようになったと実感した様子を表している。

(4.2) 英語を聞いただけでは、意味を理解することができない。前段階(単語の確認、文章のかたまりごとの聞き取り)を丁寧にやるべきだ。

【気づき】 【能力診断】 【学習方略】

(4.3) 分からない単語をなくすこと、意味理解・内容理解することを目標に練習した。単語を理解し、だいたいの文章の内容が理解できるようになった。

【次の目標】 【成果】 【実感】

(4.4)では、次のステップとして、音声を聞いて理解することを目標とし、それを達成するために書き取って確認するという学習方略を考え出したことが記されている。その結果、(4.5)では、単語を理解することができたようになったと練習の成果や評価を報告している。

(4.4) 音声→言葉の理解を深める。書き取ること(綴り中心ではなく)で、1つ1つの単語を確認するように進める。【次の目標】 【学習方略】

(4.5) 音声を聞いて書き取ることで、話されている単語1つ1つをきちんと理解することができたように思う。【学習方略】 【成果】 【評価】

(4.6)では、次のステップとして、発音練習が必要だと自己診断し、オーバーラッピングに移ったとしている。目標は、(4.7)のモデルに近い発音ができることである。

(4.8)では、話せるようにするという更なる目標と練習への意欲を見せている。

(4.6) 声を出して読む練習が必要である。【能力診断】

(4.7) 発音練習(オーバーラッピング)を練習する。できるだけ、モデルに近い発音で話せるようにする。

【目標設定】

(4.8) 次回はこれを話せるようにしていきたい。

【次の目標】 【意欲】

以上から、受講生 ST1 は、聞き取りから始め、ステップを踏んだ学習で、次の目標を立て、スピーキングへと進み、順次、目標を達成しようとしたことが分か

る。練習は、聞き取り、内容理解、話す練習へと進んでいる。1つ1つ着実に進めることで、進化していく自分を実感し、動機づけていると思われる。自分の弱点や学習に必要な事項を診断し、それを克服するための学習方略を自分で見つけて目標達成に取り組んでいる。それに成功すると、次の目標を立て、地道に練習に取り組む様子がうかがわれる。自分に必要な発音練習を認識し、モデルに近い発音をめざし、最終的には、話せるようにしたいという学習意欲を見せている。何か1つを達成することが、次の動機づけとなっている。このe-Learningの取り組みでは、このように受講生が自分で目標を設定し、それに取り組むことで、学習を進めていく姿が多く見られた。

### 4.3 事例2：独自のアプローチで学習

独自のアプローチで学習に取り組んだ受講生(ST4)の事例をみる。(4.9)では、この受講生が授業の初めに見た効果的なプログラムの活用法に関するDVD映像(アルク、2016)の内容を参考に、リスニング力の向上には他の技能も関わっていると捉え、それを意識して練習に取り組む姿勢を表している。(4.10)では、その具体的な方法として、プログラムの指示とは異なる学習方法を考えて、取り組んでいる。漫然とプログラムに沿って進める学習ではなく、それ以上の主体的な取り組みと考えられる。

(4.9) 「DVDでリスニング能力を上げる際には、スピーキング、ライティングの能力も必要、もしくは、大きく関わっている」とあったので、その点を意識して、リスニングはリスニングの練習と分けて考えずに行っていく。【学習方略】

(4.10) リスニングの後にスピーキングを行った上で、再度リスニングを行って聞こえ方の違いを(次週に)確認する。【学習方略】 【次の目標】

さらに、(4.11)では、リスニングをリーディングにつながる方法を考案している。(4.12)では、成果として、聞き取れる単語の量が増えたことが記述されている。そして、自己の成長や変化を実感し、それが新たな動機づけにつながっている。成功体験が動機を高めていると考えられる。また、(4.12)の冒頭では、機器の不具合でできなかったスピーキングの録音を、リピーティングやオーバーラッピングで発音練習を補完している点は意欲的な取り組みと捉えられる。

(4.11) 日本語訳を見ずに練習を行う。リスニングの文も英語だけで確認し、リーディングにつなげる。【学習方略】

(4.12) スピーキングはハードウェアの不具合から録音できなかったが、リピートやオーバーラッピングを丁寧に行い、再度リスニングの文を聞いてみた。一度文に触れたからであるかもしれないが、聞き取れる単語の量が増えたと感じた。この成長、変化を大切に、今後も行っていきたい。  
【学習方略】【分析】【成果】【意欲】

(4.13)から、会話のリスニングにおいても、スピーキングと組み合わせて練習し、技能横断的な練習方法を貫いている姿勢がうかがえる。自分が効果的だと信じる独自の方法で練習に取り組むことで、学習意欲を高めていると思われる。

(4.13) 今回は会話の文章で練習を行った。「会話」のリスニングにおいては、場面を理解することが重要であると考えられる。さらに、Q&A になるものが多いので、語調などに留意して聞く必要があるため、スピーキング練習も合わせて行う。  
【学習方略】

(4.14)では、それまでの自分の行ってきた練習法を振り返り、その妥当性を評価している。自分なりに、新しい知見を得て、結論に至っている。

(4.14) 場面理解、語調に注目して聞き、それをスピーキング練習でも留意して練習を行うことで、より正確に聞き取ることができた。会話の文章においては、スピーキングの点も注目するとリスニング力UPへの近道になりうると考えた。  
【分析】【方略】【成果】【結論】

以上から、プログラムが提示する学習手順とは異なる独自の方法で学習を進めたことが分かる。そして、一定の成果を達成したことを報告している。自分に合った取り組みの方法を考えた点が評価できる。

#### 4.4 事例3：失敗を重ねて取り組んだ学習

e-Learning における学習への取り組みは成功ばかりとは言えない。ここでは、スピーキングの練習において思うように進まなかった受講生(S10)の事例を紹介する。(4.15)は、この受講生のスピーキングの際の学習方法である。(4.16)から、その方法で練習したところ、うまくいかず、落胆したことが記されている。

(4.15) お手本をよく聞いてイントネーション、タイミングを合わせる。録音した自分の声と手本を比べて直す。【学習方略】

(4.16) イントネーションを合わせるようにしたけど、完璧にはできなかった。直すべきところがたくさんあって、へこむ。【失敗】【落胆】

しかし、(4.17)では、これらの失敗を基に別の練習の方略を考えたことが分かる。(4.18)では、その方法で練習したが、またしても失敗したことが書かれている。

(4.17) 母音をはっきり発音した方がいいと思った。次回は、「口を大きく開けてはっきり」を意識する。  
【学習方略】【分析】

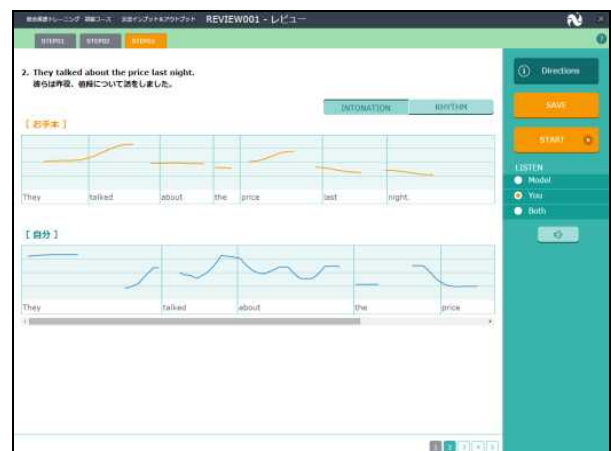
(4.18) 母音に意識して話してみたけど、うまくできなかった。単語と単語の間が切れてしまう。  
【学習方略】【失敗】【能力診断】

この受講生は、失敗で落胆しても、それが契機となり、新しい方略を考え、次の練習に取り組んでいる。よって、失敗は、必ずしも学習動機を損なうものではないと言える。勿論これは授業であるからかもしれないが、そうならば、e-Learning においてある程度の学習に関する教師の管理は有効と言えよう。

#### 4.5 事例4：発話の録音再生機能を活用した学習

発話の録音再生機能を活用して、スピーキング練習に取り組んだ受講生(ST18)の事例をみる。

このプログラムは、自分の声を録音してモデルの音声と比較できる点が特徴である。音声はグラフで表示され、視覚的にも確認できる。【図1】は、上がお手本、下が自分の音声を表している。これを見て、聞き比べたり、繰り返し練習することができる。



【図1】プログラムのマニュアル p.39 より転載<sup>2</sup>

(4.19)では、単語の繋がりを意識して聴き、録音した自分の音声とモデルとを聞き比べることにより、正しいイントネーションを身につけようとしていることが

記述されている。(4.20)では、その結果を分析し、できなかったことを明確にしている。そして、それを次の目標にしている。

(4.19) 単語と単語の繋がりを意識しながら聞き、スピーキングで真似をできるようにする。録音された自分の声をモデルの声とよく聞き比べる。

【目標設定】 【学習方略】

(4.20) 音の繋がりに関してはうまくできたと思うが、音の強弱・高さを気にして行えなかったと思う。次は完璧に！【成果】 【次の目標】 【評価】 【失敗】 【能力診断】

(4.21)では、細かい発音の区別を目標としている。

(4.21) 次は、「r」と「l」の発音に注目したい。まだ、区別ができていない。次回の改善点にしたい。

【目標設定】 【能力診断】 【次の目標】

(4.22)では、レシテーションに向けて、聞き取り易い発音とは何かを考えたことが分かる。英語を皆の前で話すには、単なる発音やイントネーションが正しいだけでは足りないと判断したようである。レシテーションの課題は、練習に更なる気づきや英語に磨きをかける契機となったと思われる。

(4.22) 自分が話しているのが聞き取り易いのかどうかは、自分の録音を聞いているだけでは足りなく、皆の前で話すのは別だと思った。【分析】 【方略】

(4.23)は、授業全体の感想である。学習開始時当時は、恥ずかしい気持ちがあったが、練習を続けるうちにそれが払拭され、何度も取り組んだことが記されている。

(4.23) e-Learning を始めてすぐは、パソコンに向かって話すのも、自分の録音した声を聞くのも何だか恥ずかしかったけれど、それによって強弱やイントネーションの切れ目など直すべきところに気づくのに最高の機能だということが分かったので、途中からは、何度も自分の声を聞き直すようになりました。 【不安】 【発見】 【気づき】 【意欲】

(4.24)は、このプログラムの機能に対する感想である。始めてこのプログラムを体験し、スピーキングの機能に感心している。

(4.24) 自分の声の高さ、切れ目が表示されるのは、お

もしろかったし、それに合わせることで、実際の音声に近づくので凄いいと思った。 【発見】

(4.25)は、反省点を記している。このプログラムでは、音声のスピードを調整することができる。その機能を使った練習を行い、効果があったことを報告しているが、十分に使いこなせなかった点を反省点としている。意欲的な取り組みができたと考えられる。

(4.25) リスニングでは、2.0 倍速で聞いた後、1.0 倍速(通常の速さ)で聞くと、聞こえやすくなったなと感じた。しかし、1.4 倍速、2.0 倍速の機能を使いこなせなかった。スピーキングでは、発表でなくても聞き手を意識して(分かりやすく)話すことが出来なかったのも反省点である。【学習方略】 【反省】 【意欲】 【分析】

#### 4.6 事例5：レシテーションへの独自の取り組み

レシテーション(クラス全員の前でのパッセージの暗唱発表)の課題へ取り組みをみる。以下は、受講生(ST3)の取り組みの事例である。ここでは、これまでのリスニングやリーディング練習では見られなかった幾つかの取り組みが見られた。

この受講生が選んだのは、ユニット 22 の同僚との電話での会話で、風邪を引いたので会社を休むことを伝える場面である。(4.26)では、リスニングの際に、場面や気持ちを汲み取りながら聞くという目標を設定している。これは、意味を理解したり、単に正しい発音やイントネーションを聞き取ることを一歩進めた目標と考えられる。教師は何も指示してないので、この受講生は、自分でこのような目標を考えたと言える。

(4.26) 発表するユニットを決めて、英文を聞くことによって、どのような場面になるのか、どのような気持ち・テンションで話されているのかなどを抑える。【目標設定】

(4.27)では、文章のポイントを見つけるのが目標となっている。英文の内容でどこが重要かを考える聞き取りをめざしている。単に文章を暗唱するという以上の目標と考えられる。

(4.27) 英文の中でどこがポイントかを聞き取り、次回以降の練習のポイントにする。 【目標設定】 【学習方略】

(4.28)では、レシテーションにおけるパフォーマンスを意識して、スピーキングの練習をすることを考えて

いる。ここで着目すべきことは、「どのように発表したらいいか」ではなく、「どのように発表したいか」と自分の主体性をもって発表することを考えている点である。「咳払い」など、自分なりの解釈とアレンジを考えているという点はおもしろい発想である。

- (4.28) 元の英文について大まかに知ることができたので、後は、どのように発表したいか考え、それに向けてスピーキングの練習をしたい。咳払いなども入れても良いと思う。【成果】【学習方略】【意欲】

これらの考えは、(4.29)の練習にも反映されている。

- (4.29) Tom や Susan の状況を考えて発音するように心がけたが、まだまだ自分のものにできていないので、もう少し練習が必要だと思う。【目標設定】【能力診断】【課題】

レシテーションでは、いくら発音がモデルに近くても、そのままではコミュニケーションにならない。説得力のある話し方、アイコンタクト、身振り等が必要である。発音は完璧でなくても、十分に通じることや、それをパフォーマンスで補うことも可能である。レシテーションの課題を与えることで、言語コミュニケーションとは何かを考える機会になったと考えられる。

#### 4.7 事例6：深いセルフモニタリングによる学習

最後に、明確な目標を立てて、自分の学習を分析しながら練習に取り組んだ受講生(ST4)の事例をみる。この受講生の学習記録からは、自分の学習を深くセルフモニタリングして学習を進めた様子が分かる。

(4.30)は、目標設定練習の初回レポートの記述である。スムーズな聴解を目標にして練習し、目標を明確にすると「丁寧に練習することができる」と、目標設定の意義を見出している。また、英文のまま理解していくという方略を用いた結果、理解が速くなることに気づいた。さらに、リスニングを丁寧にすることで、ディクテーションを聞き直す回数を減らすことができたという成果を報告している。これらは、この受講生に関して言えることであるが、自分に合った方略で成果を実感していることが分かる。

- (4.30) リスニングについては、先ず、耳で聴いて、何を言っているかスムーズに分かるようになることを目標に練習した。その結果、学習目標や学習の方法を決めてから取り組むことで、1回1回のリスニングを以前よりも丁寧にすることができた。聞

いた英文を英文のまま理解していくことを心がけたため、これまでのような英文を聞いてから、日本語を介して理解するというような時間を減らすことができた。ディクテーションもリスニングを丁寧にできたことにより、聞き直す回数を減らすことができた。【目標設定】【学習方略】【意義】【発見】【分析】【成果】

(4.31)では、リスニングにおける意味の理解について、詳しく分析している。英文を英文のまま理解することに集中しているようだが、なかなかうまくいかないのはなぜかを考えている。

- (4.31) リスニングでは、全体を聞くことで、大体の内容を理解することはできるが、一文をポンと出されると理解が追いつかない。おそらく説明文だと一文一文が会話文よりも長いため、脳内で処理が追いつかないからだと考えられる。そもそも、まだまだ英文→日本語の処理をしていて、英文のまま理解できないのが問題であるが... 【分析】【失敗】【能力診断】【問題】

(4.32)では、さらに英文を英文のまま理解できるように終始努力し、その過程をさらに細かく分析している。翻訳する方法がなぜ内容全体の把握を遅らせるかも考えている。

- (4.32) 英文を英文のまま理解することを終始意識して臨んだが、英→日の変換を脳内で行うやり方よりも内容全体の把握度が高かった。英→日の変換を行うと、処理が追いつかず、且つ、分からない単語が出てくるとそこで止まってしまって、後の英文を聞き逃してしまう要因になってしまっただと考える。【学習方略】【成果】【分析】

(4.33)では、スピーキングの練習に取り組んだ様子が記述されている。繰り返し練習することが内容理解にもつながったと成果を述べている。また、自分なりのアレンジをする余裕が生まれたことから、良い取り組みになったと評価している。(4.34)では、音の繋がりを意識して発音練習した結果、上達したと記している。

- (4.33) 何度もリスニング、オーバーラッピングを繰り返すことで、内容を頭の中に入れることができた。最終的には、何を言っているかスムーズに分かるようになったし、自分なりのアレンジをして発話する余裕も生まれたため、良い取り組みになったと思う。【学習方略】【成果】【評価】



(4.34) ディクテーション、オーバーラッピングは、単語毎の発話時のつながりを意識して行えたので、前回よりネイティブに近づけたのではないかと思う。流れるように発音できた。 【学習方略】  
【成果】

(4.35)では、これまでの取り組みを振り返り、自主学習では、どれだけ具体的な目標を置けるかが取り組みや結果に大きく影響するという自分なりの結論に達している。

(4.35) 今まで継続して e-Learning によるトレーニングを行ってきたが、今回が最も内容に深みのあるトレーニングになったと思う。リスニングでは、今回新たに「英文を英文のまま理解すること」を追加したが、この項目によって、目標がより具体化して、意識することが明瞭になったためだと考えられる。スピーキングの方では、初回から今回まで継続した学習目標を置いてきた。こちらは、具体的にであったため、始めから意識しやすかった。よって、自主学習をする際、どれだけ具体的な目標を置けるかどうかで取り組みや結果に大きく影響してくると考える。【省察】【目標設定】  
【分析】【思考】【結論】【発見】

この受講生の特徴は、学習のセルフモニタリングによる深い思索である。聴いて分かるようになるという学習目標の達成のために、その方法を模索し、日本語に訳すより英文のまま理解する方が効率が良いと結論づけている。自分なりの方法を実践し、最善の方法を検証して、その上で結論に至っている点が評価できる。

## V 成果と課題

学習記録の分析の結果、レポートには「自分の実力や弱点を発見できた」「目標設定でより進歩が自覚できた」「単にモデルの真似をすることから自分らしい表現や感情の込め方を考えて練習をした」「学習目標や学習の方法を決めてから取り組むことで、1回1回のリスニングを以前よりも丁寧にすることができた」「自主学習をする際にはどれだけ具体的な目標をおけるかどうかで取り組み方や結果に大きく影響してくる」と考える」等の内容を表す記述が見られた。まとめると、本実践は、以下の学習を促進したと考えられる。

- ① プログラムのレベル・内容、特色等を把握する。
- ② 目標設定の時点での自分の熟達度を把握する。
- ③ 達成可能な(合理的な)目標を定める。

- ④ 目標達成のための学習方略を考える。
- ⑤ 目標達成のために(意欲的に)練習に取り組む。
- ⑥ 学習の成果・到達度を評価する。
- ⑦ 自分の学習動機を高める・継続する。
- ⑧ 次の目標を考える。学習の自己調整をする。
- ⑨ 学習過程を振り返る(セルフモニタリング)。
- ⑩ 学習サイクルを毎回繰り返して蓄積する。

本研究からは、自分に益のある目標を設定したこと、自分なりの練習法やストラテジーを用いて学習したこと、上達を意識して練習したこと等が明らかになった。

そして、各自が英語の上達のために当該のプログラムをどのように活用したら良いかを考えることで、意味のある学習を創り出し、主体的、能動的、自律的な学習への取り組みを促したことが示唆された。学習者の裁量を最大限に尊重することで、学習意欲を高め、自主的な学習を促した。学習者自身が課題を設定することによって自律性が高められることは、Dornyei (2001)で提示されている。また、田口(2016a)の研究でも実証されている。

また、自己の取り組みを診断・評価することで、新たな目標を見出し、更なるチャレンジや学習継続の契機となったことが推察された。さらに、学習記録でセルフモニタリングすることで、自己の学習に関するメタ認知を促したと考えられる。受講生は、自分なりの e-Learning への効果的なアプローチの方法を見出し、成功、失敗、落胆、達成感等の様々な感情を伴う学習体験をバネにして、主体的・能動的に学習に取り組むことができたのではないかと思う。

しかし、本実践では、英語力の上達を測定するには至らず、この点は今後の課題となった。

## VI むすび

本授業の目的は、提供された英語 e-Learning プログラムを学習者(受講生)が自分に最大限効果があるような活用の仕方での学習し、学習成果を得ることである。外国語教育の教科書・教材というのは、自分の熟達度に適合したものを使用するのが理想ではあるが、多様な学生を対象とした大学の教育課程の中では、様々な制約があり、必ずしもそのようにいく場合ばかりとは言えない。

そのような環境の中で、意義ある学習をサポートするのが教師の役割の1つであるとするなら、本実践では、学習者が自分の学習の目標を自分で探し出し、達成への方略を自身で見つけ、達成に向けて努力し、成果や達成感を感じ、自分を更なる目標へと誘うという意味で、「学習の方法」を学んだと言える。

学生の学びと成長を、体系的・包括的に示したものとして溝上(2015, p. 37)は、フィンク(Fink, 2003)の意義ある学習経験論を取り上げ、そこでは「基礎的知識」「応用」「統合」「人間の次元」「関心を向ける」「学び方を学ぶ」の習得をめざし、知識の習得、技能・態度(能力)の開発を超えて、広く人格形成にまで及ぶ目標が示されていることを指摘している。本授業は、e-Learning への学習アプローチを通じて、この中のまさに「学び方を学ぶ」という目標達成のための実践であった。

### 謝 辞

英語サポートセンターの研究補佐員の方々には、学生の利用 ID の登録申請、プログラムの使い方等の説明、指導資料の貸与等でお世話になりました。何度も授業に足をお運びいただき、機器のトラブルへの対応やプログラムの円滑な使用に関してご支援いただきました。また、本稿をまとめるにあたっては、3名の査読者の方々より、有益なご指摘をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

### 注

<sup>1</sup> CEFR-J Version 1.1 ©2012-2015 CEFR-J 研究開発チーム (代表：東京外国語大学 投野由紀夫)の基準。  
<http://www.cefr-j.org/download.html>

<sup>2</sup> ALC NetAcademy NEXT 総合英語トレーニング 初級コースコースガイド Ver 1.0, 2016年2月1日発行

### 参考文献

- アルク (2016). 「ALC NetAcademy NEXT」総合英語トレーニングコース.
- アルク(2016).『完全攻略! ALC NetAcademy NEXT』附属DVD-ROM, アルク.
- アルク教育社 (2006). 「ALC NetAcademy2」.
- アルク&NTT ラーニングシステムズ(2013). 「アルクスマートラーニング」参照先：<http://alcsmartlearning.jp/>
- エリザベス・F・バークレー(2015). 「関与の条件—大学授業への学生の関与を理解し促すということ」『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』松下佳代編著, 勁草書房, 58-91.
- 関田一彦・三津村正和(2015). 「意味のある学習を意識した授業デザイン—教師としての素養を学び磨くというストーリー」『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』松下佳代編著, 勁草書房, 189-214.
- 田口達也(2016a). 「カリキュラム変更による英語力、学習時間、学習自律性への影響—小学校英語教育とグローバル人材育成に向けて—」『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み—英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて—』愛知教育大学外国語教育講座著, 鳴海出版, 38-53.
- 田口達也(2016b). 「英語授業における EnglishCentral を活用した研究—学習行動、学習意識、そして課題—」『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み—英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて—』愛知教育大学外国語教育講座著, 鳴海出版, 38-53.
- 田口達也(2016c). 「「アルクスマートラーニングを使用した英語学習実態に関する研究」」『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み—英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて—』愛知教育大学外国語教育講座著, 鳴海出版, 63-75.
- 建内高昭(2016). 「小学校英語を見据えた e-learning 学習—EnglishCentral を利用した立場から—」『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み—英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて—』愛知教育大学外国語教育講座著, 鳴海出版, 54-62.
- 田口達也・小塚良孝・浜崎道世・建内高昭・山田美樹・稲垣真由美(2016). 「英語授業における EnglishCentral を活用した研究—学習行動、学習意識、そして課題—」『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み—英語力と学習意欲を高める学習環境の充実に向けて—』愛知教育大学外国語教育講座著, 鳴海出版, 76-89.
- 松下佳代(2015). 「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』松下佳代編著, 勁草書房, 1-27.
- 溝上慎一(2015). 「アクティブラーニング論からみたディープ・アクティブラーニング」『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』松下佳代編著, 勁草書房, 31-57.
- Barkley, E. F., Cross, K. P. & Major, C. H. (2005). *Collaborative learning techniques: A handbook for college faculty*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Dornyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fink, L. D. (2003). *Creating significant learning experiences: An integrated approach to designing college courses*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

EnglishCentral (2015). 参照先 : [tps://ja.english central. com /videos](https://ja.englishcentral.com/videos)

Entwistle, N., McCune V., & Walker, P. (2010). Conceptions, styles, and approaches within higher education: Analytic abstractions and everyday experiences. In R. J. Sternberg, & L.F. Zhang (Eds.), *Perspectives on thinking, learning, and cognitive styles* (pp. 103-136). New York: Routledge.